

漢語近世音のはなし---(1)近世音とは何か？

中村雅之

§0、目的

本稿の目的は、漢語近世音についての概略を示すことにある。個別の時代、個別の資料についての研究はこれまでも多く存在したが、総合的な概説は筆者の知る限りほとんどない。毎回具体的なトピックを設けて、10回程度の連載を予定している。

§1、定義

漢語音韻史を上古音・中古音・近世音に分類することは普通に行われているが、それぞれの定義は研究者ごとにニュアンスが異なる。

資料を中心に考えた場合、『詩経』の押韻から帰納される体系が上古音を、隋・陸法言『切韻』(601年)の体系が中古音を、元・周德清『中原音韻』(1324年)の体系が近世音を、それぞれ代表する。そして時代区分としては近世音を元・明・清の音韻体系とするのが一般的である。また、『中原音韻』の体系を「古官話(Old Mandarin)」と称して、後の「近代官話」と区別することも、しばしば行われる。

本稿における近世音のとらえ方は、従来のものとはやや異なっている。ここでは、近世音の起点を遼代にまで引き上げる。近世音の話し手が、もと非漢語話者として北方にあった人々(すなわち契丹・女真・蒙古など)とその支配下にあった漢人たちである点を重要視するからである。彼ら北方人の漢語はいわゆる「漢児言語」<sup>1</sup>であるが、それは後に清代北京語となり、さらに南京官話の影響を蒙りつつ普通話となってゆく。本稿においては、南京の発音が標準と見なされた14世紀末～19世紀前半の役人たちの公用語(いわゆる官話)を近世音の対象からは切り離して扱う。官話の音声は北京の口語音に絶えず影響を与えてきたが、その体系は異なるものである。

契丹人の遼朝が北京を政治拠点の一つとしたことが、近世音の成立、さらには現代

---

1 漢児言語の定義は太田(1954)に従う。すなわち、北方の非漢族支配下にあつて、漢人を含む諸民族間の共通語として用いられた言語である。その文法特徴は、SOV語順と後置詞(助詞)の利用を容認する点にある。漢児言語が元朝成立以前にすでに存在したことについては『夷堅志』『契丹誦詩』の記述を検討した中村(2001)で述べられている。

cf. 太田辰夫(1954)「漢児言語について---白話発達史における試論」『神戸外大論叢』5-2.

中村雅之(2001)「契丹人の漢語---漢児言語からの視点」『富山大学人文学部紀要』34.

の普通話の成立にとって、一つの重要な転機になったと考えられる。それ以降、女真人の金朝、さらに蒙古人の元朝と、北方中国に非漢族の支配が続く中で漢児言語が発達し、近世音が確立したのである。したがって、近世音を単に中古音よりも新しい体系としてとらえるだけでは不十分で、むしろ、その地理的性格にこそ注目する必要がある。前期中古音が洛陽ないし南京の言語を規範とし、後期中古音が西安の言語を基礎としたのに対して、近世音は北京を中心とする地域の体系なのである。<sup>2</sup> 20世紀に共通語として制定された「普通話」が、その発音の基礎を北京音に求めたことは、現代音が近世音の伝統の上に立つ以上当然の帰結であったと言える。

要するに、本稿に述べる近世音史は、一面では北方諸民族の漢語獲得という言語接触の研究であり、また一面では現代中国語すなわち普通話の成立を知る研究でもある。

## §2、特徴の概略

中古音と近世音とを分かつ特徴は、韻尾/-p,-t,-k/の有無である。中古音においては、内破音に終わる短促調の音節を全て「入声」という声調としてとらえていた。「十」「合」「納」(以上は/-p/)、「八」「結」「末」(以上は/-t/)、「落」「六」「木」(以上は/-k/)などは、遼代以降その韻尾を失い、長い音節になって他の声調に合流した。つまり、もと入声だった「納」は近世音では去声の「那」と同音になった訳である。

前期近世音(いわゆる古官話)の特徴は、中古音以来の/-m/韻尾を有することで、この韻尾は15世紀には/-n/へと合流する。その後が後期近世音ということになるが、種々の韻の合流(/-ian/の/-ien/への合流など)を経て、尖音と団音が合流する(/ki/と/tsi/がともに/tci/になるなど)ことにより、18世紀にはほぼ現代北京語の音韻体系に近づく。19世紀後半の、「学」「略」などにおける/io/韻から/yɛ/韻への変化をもって、現代音の体系が完成することになる。

## §3、方法

本稿では韻書や韻図などの理論的な資料は最小限にとどめ、対音資料によって近世音を考えることにしたい。具体的には、契丹小字、パスパ文字、モンゴル語の漢字音訳、ハングル、宣教師のローマ字資料、そして満洲文字資料などである。近世音研

---

<sup>2</sup> 南京、西安、北京などは過去の王朝において別名で呼ばれたこともあるが、ここでは全て現代の呼称で統一する。

究が言語接触の研究という性格を持つ以上、対音資料を中心に据えるのが王道というべきで、韻書や韻図の分析はあくまでも補足に過ぎない。整理されすぎた資料を過信することは、実際の言語から離れて架空の体系を追う危険を孕んでいる。韻書としてはただ一つ『中原音韻』(1324)のみを利用する。前期近世音の体系をもっとも忠実に反映するものと、一般に考えられているからである。

一方、対音資料においても、韻図などの情報によったり、伝統的な表記を維持したりして、必ずしも同時代の体系を反映しない部分が含まれることがある。そのため、複数の対音資料を相互に参照しつつ、各時代の実際の漢語音に近づく努力が必要となる。例えば、13～14世紀のパスパ文字表記や15～16世紀のハングル表記における“濁音声母”や、ハングル表記に見られる“入声韻尾”などは、理論的な産物に過ぎない。対音資料の目利きになることが近世音研究の要諦である。